悪ノ物語

紙の悪魔と秘密の書庫

mothy_悪ノP／著
柚木きひろ、△○□×（みわしいば）／イラスト

PHP
ジュニアノベル

AKU NO MONOGATARI

KAMI NO AKUMA TO HIMITSU NO SHOKO

目次

1話～004
2話～012
3話～020
4話～032
5話～037
6話～050
7話～055
8話～074
???～083
9話～088
10話～097
11話～102
12話～107
13話～130
14話～139
15話～143
16話～147
17話～157
18話～169
エピローグ～176
???～189

1話

古いなあ。

そのマンションを外から見た時、イツキが最初に思った感想がそれだった。

良く言えば古風。

悪く言えば古くさい。

別におんぼろってわけじゃない。きちんと手入れはされているみたいで壁には目立ったよごれはないし、穴があいたりもしていない。

それでもやっぱり、イツキの心には少しだけ、不満な気持ちがあった。本当ならこんな中古のマンションの一室じゃなく、真新しい一軒家に引っこす予定だったのだから。

「いいじゃないか。レトロな感じで」

イツキとはちがい、父さんはわりとここのことを気に入ったようだった。

引っこし先の住まいを今日初めて見たのはイツキだけじゃない。父さんもだ。普通ならありえない話だが、これにはいろいろと事情がある。

「まあ、夏休みの間だけだから」
イツキの気持ちに気がついたのか、父さんはなだめるようにそう言ったあと、さっさとマンションの中に入っていってしまった。

すぐそのあとについていく気になれなかったのは、まだ昼なのにもかかわらず一階の窓のカーテンが全て閉まっていたからかもしれない。
中が見えないことが、イツキの心にわずかな不安をいだかせていた。
……もちろん、この中にゆうれいやモンスターがいるだなんて思っているわけじゃないけど。
そのカーテンの一つが勢いよく開いた。
「やあ、イツキくん。よく来たね」
さらに窓を開けて話しかけてきたのは、このマンションの持ち主でもある伯父さんだ。
「こんにちは」
近づいてあいさつすると、うす暗い部屋の中にたくさんの本棚が立ち並んでいるのに気がついた。父さんもいる。
「そんなところにいないで、早く中に入ってきなさい」
父さんにうながされたので、イツキはかけ足でマンションの玄関に入った。
すぐ目の前に上に向かうための階段が見えたがそれは無視して、父さんたちの声が聞こえてくる左の部屋の扉を開ける。
その部屋は、予想していたよりもずっと広かった。たぶんマンション一階の左半分は全て、こ

の部屋だ。イツキが入ってきたもの以外にもいくつかの扉があり、その間をうめるように本棚が置かれていた。
それらの中には無数の本がしきつめられている。マンションの見た目と同様、古めかしくて地味なデザインの本だ。
「図書館みたいですね」
イツキが素直な感想を述べると、伯父さんは少しはにかむように笑った。
「壁を取りはらって一部屋にしたんだ。こちらだけじゃなく反対側も同じようにね。一階は全部、本の置き場所になっている」
父さんが部屋を見回しながら、伯父さんにたずねる。
「これ、全部マサキさんのコレクションですか？」
「今はね。だがもともとは親父の物だよ。このマンションといっしょにおれが相続したんだ」
伯父さんのお父さん――つまりイツキにとってはお祖父さんにあたる人のことだ。
イツキにはお祖父さんに関する思い出はほとんどない。
六歳の時、一度だけ入院しているお祖父さんに会いに行ったことはあった。
その時は母さんと一緒に駅まで行って、そこで赤い自動車に乗った母さんのお兄さん――マサ

キ伯父さんと待ち合わせして。
病院で見たお祖父さんはずっとねむったままで、結局その日は一度もお祖父さんと会話することなく帰ったことを覚えている。
お祖父さんが亡くなったという電話が母さんにかかってきたのは、それから数か月後のことだった。
「――本のいくつかはキョウコにゆずるつもりだったんだけどね。あいつ、じゃまになるからいらないって」
伯父さんがそう言いながら、ため息をついた。
キョウコというのは、イツキの母親の名前だ。
その母さんは先にこのマンションに着いて、今は二階の部屋で荷物の整理をしているはずだった。
「イツキくん、本は好きかい？」
ふいに伯父さんがそう聞いてきた。
「うん。でも……ちょっと見てもいい？」
適当な本を指さしイツキがたずねると、伯父さんが無言でうなずいたので、その本を棚からぬ

き取ってページを開いてみる。
「……やっぱり。ぼくにはちょっと難しくて読めそうにないや」
「ハハハ。それは洋書だからな。さすがに小学生に英文は厳しいか。でも、この中には日本語で書かれた本もちゃんとある。子供向けの童話集なんかもね……これなんかどうだろう？」
そう言って伯父さんは別の本を棚から取り出し、イツキにわたしてきた。
「……『ヘンゼルとグレーテル』って。さすがにちょっと子供向け過ぎるよ」
「お、そうか？　うちのハルトなんかはこのレベルでも放り出してしまうけどね」
「『ハルト』？」
「おれの息子だよ。そういえばイツキくんはまだ会ったことがなかったか。今はサッカーの練習に行っているから、帰ってきたら紹介するよ。夏休みが明けたら同級生になるだろうしな」
つまり、その『ハルト』くんはイツキと同じ小学五年生ということのようだ。
伯父さんが話を続ける。

「まあともかく、夏休みの間はイツキくんも何かとたいくつだろうからな。こっちにはまだ友達もいないわけだし。ハルトと遊んでやってくれてもいいし、もしあいつと気が合わないようなら……ひまつぶしにここを図書館代わりにしてくれてもいい」

「勝手にここの本を読んでもいいの？」

「ああ。正直な話、おれもここにある本の大半はほとんど手に取ることすらしていないんだ。せっかくの本も、読まれないままではかわいそうだからな。ただ、どれも大事な本だ。ここから持ち出したりはしないでくれ」

「うん。わかった」

「……あ、それと」

伯父さんは奥にある扉を指さす。

構造上、この部屋の扉のほとんどは外のろうかへとつながっているみたいだが、その黒い扉だけはちがうようだった。

「あそこは、また別の小さな書庫への入口だ。そこにはとっても貴重な物が保管されているから、入らないでほしいんだ」

「何があるの？　やっぱり本？」

「……それは秘密だ」
そんな言い方をされると、余計に気になってしまう。
だけどあまり変に探りを入れて、常識のない子だと思われるのもいやだったので、イツキは「わかった」とだけ答えた。
「――さて、そろそろ行こうか、イツキ」
父さんがイツキのかたに手を置いた。
「母さんのきげんが悪くなる前に、荷物の整理を手伝わないとな」
イツキはうなずいたが、本音ではあまり気が進んでいなかった。
――どうせ九月になれば、また荷造りをやり直すことになるっていうのに。
「では……マサキさん、また」
父さんがろうかへの扉のノブに手をかけながら、伯父さんにそうあいさつする。
「おう。何か困ったことがあったら気軽に声をかけてくれ。おれの部屋は２０１号室――君たちの部屋のとなりだから」
イツキは父さんと一緒に頭を下げた後、図書室を出た。

2話

引っこしの日から三日くらいは近所を散歩して、新しい町の景色を眺めた。
夏休み明けから通う予定の、学校への通学路も覚えた。
その後は引っこし直前に買ったテレビゲームをやったりしていたが、それもすぐにあきてしまった。新しいゲームを買うにしても、おこづかいが足りない。
（はあー。もっと別のゲームソフトにしておけばよかった）
後悔しても使ったお金はもう、もどってこない。
お金に意思とつばさがあって、自分のところへ飛んできてくれるなら別だが、そんなことはありえないのだ。
次第にイツキは、マンション一階の『図書室』でひまをつぶすことが多くなっていった。
ここにある本は古いものばかりだが、イツキの興味をひくような内容の小説なんかも、少しだけだがあった。

その中の一冊を手に取り、近くの椅子に座って昨日の続きから読みはじめる。
本が日焼けしてしまうので、カーテンは開けないようにと伯父さんからは言われている。
それでもカーテンのすきまからは、八月の強い日差しがわずかに入りこんできていた。エアコンはちゃんと効いているので快適だ。
本の中でめしつかいがとなりの国の商人と話しはじめたころ、イツキの背後で扉が開く音が聞こえた。
「よう。ひまそうだな」
話しかけてきたのはハルトだった。今日はサッカーの練習が休みのようだ。
ボールではなく真新しいノートを一冊、右手に持っている。
「こんにちは」
イツキは少しよそよそしい態度で、あいさつを返した。
たぶん自分とはタイプのちがう人間、というのがイツキのハルトに対する印象だった。活発でスポーツが得意——おそらくサッカーでのポジションもフォワードとかなんだろう。
一方のイツキは、たまに遊びのサッカーに参加したとしても、たいていディフェンスかキーパーをやらされるタイプなのだ。

ハルトは窓ぎわにある椅子にドカッといきおいよく座った後、机にひじを置きながらイツキにこうたずねてきた。
「本とか読んでて楽しい？」
「……うーん、まあ、それなりには」
「ゲームとかやんないの？」
「やるよ。でも、あきちゃって」
「じゃあ、スマホは？」
「持ってない」
「ふーん」
そこで会話がとぎれた。
「……」
しばらくするとハルトは気まずさをごまかすかのように、持っていたノートを机に広げた。
「だるいよなあ、日記とか」
「……」

「お前は？　宿題とか早めに終わらせちゃうタイプ？」
「宿題は……出されてないんだ」
「そうか……いいなあ。夏休みに引っこしたやつの特権ってやつだ」
学校によってはちがうのだろうが、イツキの場合は夏休みの宿題をしなくてもいいことになっていた。ラッキーではあるけれど、それがひまでひまで仕方ない現状をつくっている。
ハルトの質問は続く。
「でもさ、夏休みが終わったら、このマンションからは出ていくんだろ？」
「……うん」
「それでも行く学校はおれと同じなんだ？」
「次の家も、ここから近い場所にあるから」
「そもそもさ。なんでそんなめんどくさいことになってんの？　一か月だけここで暮らすなんてさ」
「なんか、不動産屋さんだか大工さんだかの手ちがいがあったみたいで、まだ新しい家が完成していないんだって」
「じゃあそれまで、前の家にいればいいじゃん」

「それがわかる前に売っちゃったんだ。新しい人たちがもう住んでいるから……」
「……なるほどねえ」
正しく言えばこれは父さんの確認ミスが原因で起こったことで、そのせいで父さんは母さんからこっぴどく怒られた。
その後、いろいろと考えた末に母さんが思いついたのが、伯父さんの経営するこのマンションの一室を一か月だけ借りることだったわけだ。
親類であること、そして空き部屋があったこともあって、特別に家賃ははらわなくていいことになったらしい。
「家を建てたばかりでお金がないんだから、少しでも節約した方がいいでしょ？」
母さんがまだ半分怒りながら、父さんにそう言ったのを覚えている。
引け目のある父さんは、母さんのこの提案を断ることができなかったのだろう。
「……はあー」
ハルトはため息をつきながら、日記を書きはじめた。
だがすぐに手を止めると、ポケットから取り出したスマートフォンをいじりはじめる。
「……ハルトくんちってさ、お金持ちだよね」

「うん？　なんで？」
「スマホとか持ってるし」
「いやいや、スマホ程度で金持ちとか言われても」
まあたしかに、イツキも別に家がびんぼうだからスマホを買ってもらえないわけではない。
単純に両親の「小学生にスマホなんてまだ早い」という教育方針によるものだ。
イツキがハルトの家を「お金持ち」だと言ったのには、他にも理由があった。
「伯父さん――ハルトくんのお父さんってさ、スゴイ脚本家なんでしょ？」
「それは半分だけ正解だな。『脚本家』なのは事実だけど、『スゴイ』ってのは間違いだ」
「でも、父さんが言ってたよ。伯父さんは昔、大ヒットしたドラマの脚本を書いたんだ、って」
「知らないよ。おれが赤んぼうのころの話だもん。それに当てたのはその一発だけで、最近は全然みたいだし」
ハルトはスマートフォンの画面を見ながら、こう続ける。
「このマンションもさ。古くさいせいであんまり借り手がいないみたいだし。今だって半分以上が空き部屋だもん。なんたって築百年近いんだぜ」
「築百年……それはそれですごいね。でもさすがにそこまで古いようには見えないけど」

「何度か増築とかリフォームとかしたみたいだからな」
そりゃそうか、とイツキは思った。そんな大昔に建てられた建物が最初から四階建てだというのも、あまりない話だろうし。
「見た目が今どきっぽくないのは、まあ別にいいんだけどさー」
ハルトが不満げにそうつぶやく。
「たまにネズミとか入りこんでくるんだよな。お前――ええと、名前なんだっけ？」
「イツキ。遠藤イツキ」
「ああ、そうだった。イツキはさ、ここに来てからネズミの鳴き声とか聞かなかった？」
ネズミの鳴き声……そう言えば一度だけ、聞いたことがあったような気がする。
それは借りている部屋でじゃなくて――。
イツキは奥にある黒い扉を指さした。
「あそこの中から。ちょっと前の日の話だけど」
「マジかよ！　あそこかー。父ちゃんもほとんど立ち入ってないみたいだし、ありえるかもなー」
「ハルトくんもあの部屋には入ったことないの？」
「そうだな。あの『秘密の書庫』に入っていいのは父ちゃんだけだ。理由はわからないけど……

たぶん、エッチなＤＶＤでもかくしてるんじゃねえかな」
「……」
「興味ある？」
「いや……別に」
ハルトの言った「興味」の対象がエッチなＤＶＤのことなのか、それともあの部屋自体のことなのかわからなかったので、とりあえず否定しておいた。
「まあ、ネズミ退治の業者を呼んだ方がいいって、父ちゃんに言ってみるわ」
ハルトは立ち上がり、黒い扉に近づくと、そのノブをガチャガチャと回す。
「鍵がかかっているから、おれらには確かめようもないし」
そして机の近くにもどると、置いてあったノートを拾い上げた。
「そろそろ夕飯の時間だし、おれもう行くわ」
「うん……じゃあ、また」
ハルトはノートを手に、図書室から出ていった。
……結局、日記は書き終えていないようだったが、だいじょうぶなんだろうか？
そんなことを思いながら、イツキは読書を再開した。

3話

それから数日たった、ある日の夜。
「おや、まだいたのかい」
図書室の扉をあけた伯父さんが、イツキに話しかけてきた。
「すみません。どうしてもきりのいいところまで読んでおきたくて」
イツキは持っていた本を指さした。
「そうかい。熱心なのはけっこうだけど、ほどほどにね」
そう言った伯父さんの手には、鍵の束がにぎられていた。
「……あ、もしかして、もう部屋に鍵をかける時間ですか？」
「そのつもりだったんだが……まあいいや。じゃあ鍵を預けるから、ここを出る時に代わりに鍵をかけておいてくれ」
「わかりました」
イツキは伯父さんから鍵の束を預かり、それを机の上に置いた。

「くれぐれも忘れないようにね。おれはもうねるから、これを返すのは明日の朝でいい」
「ずいぶんと早くねるんですね」
「明日は、朝早くから仕事の打ち合わせがあってね」
「そうですか……出かける前に、鍵を返した方がいいですよね？」
「いや、打ち合わせ自体はこのマンションの中でするから、昼前くらいに返してくれたらだいじょうぶだよ」
それを聞いてイツキは安心した。
伯父さんに合わせて早起きする必要はないというわけだ。
「それじゃあ、おやすみ。夏休みだからといってあまりよふかしはしないようにね」
伯父さんは図書室から出ていった。
「……」
イツキは読書を再開する。
物語はクライマックスにさしかかっている。王宮から逃げ出し、身分をかくして修道院に入りこんでいた王女様が、その正体を修道女に気づかれてしまったところだ。

――チュウ。

ネズミの鳴き声らしきものが、どこかから聞こえた。
イツキは後ろをふり向く。
そこにあるのは――あの黒い扉。
秘密の書庫への入口だ。
(……そういえば)
イツキは伯父さんから預かった鍵の束を見た。
「この中に、あの扉を開ける鍵も……あるのかな」
入ってはいけないことはわかっている。
でも……やっぱり少しだけ、気になる。
(エッチなDVDのことじゃないぞ。あの中に何があるのか、だ)
イツキは自分にそう言い聞かせながら、鍵の束を手に取った。
再び「チュウ」という鳴き声が、扉の先から聞こえてきた。
今度は、さっきよりもはっきりと。

（あんなふうに鳴かれていたんじゃ、気になって読書に集中できないもんな）
心の中で言い訳をしながら、扉の前に立つ。
鍵束の鍵にはそれぞれ、どこ用のものであるのかがわかりやすいよう、ラベルの上に文字が書かれている。
図書室用……管理人室用……屋上用……。
しかし、一つだけラベルのはられていない鍵があった。
（これかな？）
その鍵を鍵穴にさし、回してみる。
カチャリ。
どうやら正解だったようで、みごとに鍵が開いた。
「ちょっと……どんな感じか見てみるだけ……」
一度、耳をすます。
伯父さんはもう部屋に戻ったのだろう。ろうかに人の気配はない。
ゆっくりと、イツキは黒い扉を開けた。

——あまり人が出入りしていないからなのか、少しほこりっぽい。
電灯のスイッチは、入ってすぐの壁にあった。
ひかえめな光が部屋の中を照らす。
そこには……やはり本棚があった。
（当たり前だよね。書庫だって言っていたんだから）
だけど、そこにおさめられているのは……本じゃない。
紙だ。
色あせた紙の束が、びっしりと棚の中にしきつめられているのだ。
その本棚の他には、小さな机と椅子が一組、あるだけだった。

ネズミらしき生き物の姿は、どこにも見えない。
鳴き声も、もう聞こえなくなっていた。
いなくなったのか、それとも部屋のすみにでもかくれているのかはわからないが、とりあえず今は気にしないでおこう。
見たところ、わざわざ人の出入りを禁止する必要があるほど、高価な品物があるわけでもなさそうだった。
ということは、やはり『秘密』なのは――あれらの紙束に書かれている、何かなんだろうか。
「財宝のありかとか？　……そんなわけないか」
これ以上、勝手に探るのは良くないことかもしれない。
イツキだって、自分の部屋を知らないうちに母さんにそうじされた時なんかは、いつだってふきげんになるものだ。
『好奇心はねこを殺す』なんて言葉もある。
これはたしか……イギリスのことわざだったっけか。
（だけど『好奇心を失ってはならない』って格言もあった気がするぞ）
だれの言葉だったかは、忘れてしまったけれども。

たしかなのは、イツキはイギリス人ではないということだ。
（だから別に、イギリスのことわざに従う必要はないよね）
イツキは意を決して、紙束の一つを手に取った。
「ちょっとだけ……何が書いてあるのか確認するだけ……」
紙を束ねているひもをほどき、一番表にある紙をめくってみる。
そこには――ミミズがはっているような文字が、手書きで書き連ねてあった。
「英語じゃあ……ないよな。縦書きだし。でもなんて書いてあるのか、読めないや」
イツキは改めて、棚の紙束を見る。
紙の質は束ごとにちがうみたいだが、いずれも古いものであることにまちがいはなさそうだ。
（やっぱり……価値のあるものなのかな。たぶん、外にある本よりも、ずっと）
それならば、伯父さんがここに入らないように言ったのも納得だ。
手に持っている紙を、破いたりしないようていねいにめくっていく。
やはり読めそうにない。きっとこれは暗号とかではなく、昔の文字なのだろう。
江戸時代とか、あるいはもっと大昔の。
（――あ。文字だけじゃなくて、イラストもあるぞ）

それはスミでえがかれた、動物の絵だった。
「これは……ネズミかな？　まさかさっきの鳴き声は、この絵のネズミのものだったりして」
もちろん、じょうだんで言ったつもりだった。
だが。

――チュウ。

また鳴き声だ。
しかも、それが聞こえてきたのは――。
まちがいなく、この絵の中からだった。
それだけじゃない。
次のしゅんかん、今度は鳴き声じゃなく、人の話し声が聞こえてきたのだ。
「我はネズミなどではない……ハムスターだ！」
「うわっ!?」
おどろきのあまり、思わず紙束を落としてしまった。

やがてゆかに散らばった紙のうち、一枚だけがゆっくりとうかびはじめる。
それはネズミ――いや、ハムスターか――が、えがかれたあの紙だ。
次にその紙は、空中で折り紙のように折れ曲がりはじめた。
「……」
その様子に、思わず見入ってしまう。
紙は最終的には、立体的なハムスターの形へと変形していた。
紙のハムスターは、クルクルと回りながらゆかへと降り立つ。
「こうして人間に会うのも久しぶりだな。礼を言うぞ、人間の子よ」
「……別に、感謝されるようなことをしたつもりはないけど」
「我を解放してくれたではないか」
「いや、そんな覚えは――」
「我をとらえていた、いまわしき封印……貴様は我の呼び声に応え、それをほどいた」
「まさか……このひものこと!?」
イツキは手に持ったままのひもに目を移した。
よく見るとひもには、とても小さな文字でじゅもんのようなものが書かれていた。

「さあ、人の子よ！　この『ごうまんの悪魔』マリー様に何を望む？　我とけいやくし、その心を委ねるのだ!!」
「悪魔？　ハムスターじゃなくて？」
「見た目はな。だがその正体は、人の欲望を満たすべく存在する、まぎれもない悪魔なのだ！　ハーハッハッハ!!」
……なんか、よくわからないけど……いろいろとヤバそうだ。
……よし。
逃げよう。
——とはいえ散らばった紙と、このハムスターをそのままにしてはおけない。
「さあ、願いを言うのだ、人の子よ!!」
とりあえず、声がでかい。
「……あの、もう少し小さな声でしゃべってもらえますか？」
「ん？　なんでだ？」

「今、もう夜なんで」
「そうか、わかった」
悪魔というのは、意外と聞き分けが良いようだ。
「それと……いったん、元の姿にもどってもらってもいいですか？」
「なんでだ？」
「えっと……あのイラストを、もう一回ちゃんと見たいかな、って」
「――まあ、よいだろう」
ハムスターは再びうかび上がると、あっという間に一枚の紙きれへともどった。
イツキはそれを手に取ると、急いで他の紙もかき集め、持っていたひもで一つに束ねた。
順番は元通りではないだろうが、この際仕方ない。
「なっ!?　貴様、我をだましたな！」
おどろいたのは悪魔だけではなく、イツキの方もだった。
よくもまあ、こんな簡単にひっかかってくれたものだ。
紙束を元あった場所におしこんだ後、イツキは電気を消しつつ急いで外に出て、扉に鍵をかける。

ハムスターの鳴き声が扉の向こうから聞こえてきていたが、それを無視してイツキは図書室を飛び出し、階段をかけ上がり、２０２号室――自宅へと帰った。

母さんがイツキをでむかえてくれる。

「お帰り。ずいぶんとおそかったじゃない」

「うん……」

「まあ、読書は悪いことじゃないわ。でもそろそろねなさい」

イツキは無言でうなずき、自分の部屋にもどると鍵の束を勉強机の上に放り投げ、そのままベッドにもぐりこんだ。

胸がドキドキしていたが、それもしばらくの間だけだった。

やがてそのまま、イツキはねむりについた。